

新訓集

不倍之部

廿七  
廿六

津田文庫  
文庫 1  
1604  
23



早稲田大学  
図書館蔵書

倭訓栞前編二十六

洞津 谷川士清 纂

不の部

△ふ 日本紀に經字とよみりふ反也又ひく反也○二ふ三ふ十ふのふもかゝらふ  
 の節の略ふふ○箭羽のふ草木のふ文の音轉ヤゝふふゝふふふふふふふふふふ  
 ○生をよむいふの略ふ日本紀に田又林とよむ万葉集に原をよむも同  
 ○日本紀に乾の字とよむいふの轉又ほす反也○古今集にこふふふふふ  
 もまふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
 一いふふふ符字ふふふ伊曾保物語にふふふふふふふふふふふふふふふふ  
 えふふ符章に御符とふふふ道家より出て巫祝僧尼習ふ得て我物と尾  
 張津罵ふもふ符あり○万葉集に相とよむいふふの略ふ○麴筋をよむも  
 とりて作るふゆふ○万葉集蜂音と濁ふふふふふふふふふふふふふふふ  
 ○まも濁音に呼来とる弱者夫とるふふふふふふふふふふふふふふふ  
 △ふあ

倭訓栞 卷之二十六

つた文庫

010190596783

△ふいごた 倭名抄に鞆とふいごといふあり鞆は作るべし吹皮の糸今ふいごといふり素鞆也○鞆祭は十一月八日鍛冶の祭る所也三条宗近の故事に依り稻荷を祭るは今の図像に不正甚し

△ふうたい 物を量るべし正物と封袋とを分らざりて用ひし事と封袋とを或は封皮紐帯或略せり成り又包代の字を用ひ○襦袢よふ風帯と云ふ風ありて動けりけ物成ふるも西土の驚燕と云ふ本義成りて斯條也といふ一文字に引首也

△ふうりゅう 山谷集の注に風流字或美或惡隨所用之意何如耳と云ふ剪燈新話の注に風声品流擅一世謂之風流と云ふ我邦の俗やさくめけりといふ意よりふ合つて大鏡に花山院の風流者といふたりと云ふ御家と云らせ給へりまはれりといふ寢殿對し殿ふりつりあひひと云ふまはれりする事と此院のまはれりせりまはる也むいありしと云ふ樋りけてりやうといふ少住古の宮室の別々作りてりりい樋りけてり屋根別と云ふれりとも成りけて両派通せりといふ

△ふえ 笛をいふ吹枝の糸吹をもいふり又ふ物をもいふ○大笛あり長笛あり○南京笛あり長一尺四寸七孔と云ふり○南都正倉院の所蔵に瑪瑙笛象牙笛あり○思の休の日記に秋うさひてり笛うくとありといふ吹皮笛あり○牛よふく笛も牧笛といふ新六帖に

牛にのる牧のふか吹笛いふと云ふりつるの志と云ふり  
十牛の圖の騎牛飯家其意あり○凡て樂も笛派本とするより体源抄よ見えり○童蒙頌韻は將と云ふも笛より轉ヤ其語也○笛川の伊勢齋宮村よあり散木集よ後頼

建長歌合よ  
笛川のいふりつるえはるの音よ万代と吹ふるきや

音よまき根やせまき笛川に流る竹のかのうと云ふ  
長笛の賦を思ひ穿られり

ふえゆい 笛生といふ日本紀よ見えり○興義抄よ見えゆいの社といふ大和添上郡穴次神社也といふ或は思海郡笛吹山にありて笛吹の社といふ式外也伊勢國

鈴鹿郡新所村に吹苗明神の社あり姓氏録に苗吹連火明命之後也といゆ○苗吹魚ありふふと似し長奇の海に出くはす○苗吹鯛といふ其口よりて名くるあり

ふ吹

△ふし 神代紀に幽深とよむ靈異記に沖とありすふしといふありいふとよむ

同韻あり○ふかりの山懐中抄にえゆ石見邑智郡にあり

ふし 深除とあり髪と記同事ふし髪のもくをりて深くくむと記しける名

目之又深除の眉裳着の眉れいする事右官名目とええしう吹も海松ふふといふあつ管見記に永享十一年十一月廿二日武家若君五歳深髪并袴着之祝着之義同廿八日息女三才深髪車云とええ甚盤山菅山橋海松青目乃石二ツ置ともええしう米女記に御ふうしこの時六本立の御膳折つこのまぬふし

ふき

俗に路といふこの急語也俗に茶浴といふ○蝦夷の地の路の葉五六尺

よ及つしき○紫ぶとあり莖葉紫色しと花白し○朝鮮ぶとあり花一所

小族生す○琉球産に紅花の品あり愛とよむ本草に蜂斗葉と名くる是あり

○ふきを古語よふといふり日本紀に揮劔成たちをふとくし於後手ふとく

といふ万葉集に山根とやふとくといふり○古姓といふり万葉集に吹黄の川

自えり○新撰字鏡に鍍をよめり字と訓と心得し

ふき 新撰字鏡に鐵をよめり得魚金也と注せり

ふき 後漢書に注に渴鳥は為曲筒以氣引水上也といえり

ふき 史字指南に符到奉行とい唐惣章中斐行俟等定註注之法令に主者

受旨奉行各給以符といえり是也今に奉行役此より出

ふき 神代紀に吹葉といふり口氣の雲の如くあるよりつとくといふあり

垂るの古語也古事記の吹よもすくをうてとよむり吹出氣噴之中と古事記

よ吹葉よ作ふとくつとく讀し

ふき 旗といふり鞆帯也○歌の評よふきふがけ此哉といふ

振嘆をいふるのふとく尾のふとくといふもありぬふか

ふき 吹返の義私宴禮節甲の名所は左右の襲の塵也と注せり

△ふく 吹の経束のふとく又振と同一とく神代紀に揮をよめり○午の目をそふとく

吹くよみいなきつ及く也○俗よふとがたとく新様樂記よ為吹味とんん  
 又失笑也○俗よ拭をふくし吹拂の意もや○日本紀よ葺とよみ葺とよみ  
 同よふとや葺也○芽をふくとらふも吹出と意也○吹うよの秋新撰萬  
 葉集よ打吹よけり秋の草木の古今六帖よあつて草木のとあり古今集序注  
 よ此辺の草木のとけり古今集よ秋の草木のとありを正みとてけりか  
 一本よいつくんとけり又とてけり少假字よけり作者朝康也古今六帖古馬の  
 本よと朝康とあり又屋真人の長親王の後也姓氏録よ長屋とあり誤也  
 ふくむ 含とよめり類蓋のふとら了日本紀萬葉集よふくむとよみふくむも  
 しひらむやもえとけり又珍と同一葦禮以玉實口也と注と

ふくふ 腹脹とよみふくふとら吹のふとらすけよみとふくふ  
 くとええ又ふくふとらふくふとらふくふとらふくふとらふくふとらふくふとら  
 のふくふとらふくふとら○夜のふくふとら更とよめり深と意と秋よる月ふくふ露ふ  
 くとふとら同よ○和名鈔よ敷とよめり因憤起ふくと注せり源氏よたのふく  
 くとてけり憤の意也今もよ詞めり新撰字鏡よ爛とよめり又謬とよめりやぐと

よあるも同意とや

ふくろ 囊とよみ日本紀よ囊中玄櫛あり和名鈔よ袋亦作櫛とよみ囊の底ふくろとの  
 へ袋の底あるとよみ物と入とふくふとらふくふとらふくふとらふくふとら  
 ふくろとよめりこの腰ふくろ○顯宗紀人の名韓侂胄とよみとせり古  
 其製袋のこのある称とよめり○元正紀よ朝服之袋とよみ文武紀よ賜諸王  
 卿等袋様とよみこの袋とよみ○土枕の俗よ袋とよみ上指とよみ天がらふく  
 出ると名とよみ雅亮抄よひつづくとらふくふとらふくふとらふくふとら  
 るふくろとよみとせりとよめり○右宮名目に母とらふくふとらふくふとら  
 の胎中に其子とよみ時袋の中よ物あるとよみふくふとらふくふとらふくふとら  
 てよめりとよめり狭衣よあをほちを袋にめしてとあるとよみ代とよみとら  
 るとよめりこのふくろとよみとらとよみ大八洲を生とよみこの遺意とよみ○今か袋  
 とよみ尾張とよみお家と呼とよみ石見とよみ後家とよみとらとよみ女が指とよ  
 袋とよみ

ふくさ 枕草紙よ白とよみと無名抄よふくこの絹糸のやうとよみとら

帛次り之今とて手帕とて茶湯の會に起りて服茶の音也といふ襖子の音  
ふくくといふ○資暇録に襖茶梳といふ茶會のふくは此か職方れ  
るをいふ○ふくは張の柔なるをいふくは紙のきよなる紙といふ或は生  
紙次りありては此のふくは様の物也料理にふくは牛房あり米粉とて牛房  
紙也○物のたつてをいふ贏餘の茶也か一葉といふ一葉也○  
灰次押といふきりては櫛がたをいふ也○棘源抄にあり

ふくべ 執をいふ淮南子に百人抗浮といふ浮執也といふといふ浮執の音を  
器に用ふるよりの名ありといふ一説に檣州服部より出たてを服部の音を  
呼ぶといふ○長くいふ長柄壺也倭名抄に雙鯉次訓に犯之則腹脹  
浮出水上者也といふ瓶の義も同一

ふくたむ 源氏に少くたむといふ髪たむと又ふくたむといふたむ給つる  
髪たむといふ枕多紙に文の使の事よりたむといふたむてといふといふ埃囊  
扱に紙ふといふたむといふたむに乾靴の字ありといふ童蒙頌韻にふくたむの字書  
に乾靴に散毛良といふといふ新撰字鏡に髻髻をいふたむといふといふ今俗

綿といふ○俗に人然警業といふ事ありといふと通つる

ふくくといふ 和名鈔に音とて本朝式にふくくといふといふの義あり○万  
葉集に布久思毛與といふといふ

△ふけ 日本紀に埴田をいふといふ今ふけといふ埴田といふ或は埴といふ○  
頭髮乃ふけを浮垢の音あり○本草に頭垢といふ○日本紀に深をいふ  
夜ふけふといふ是れ我世のふけの高年といふ○鉄炮の火口はふけといふ詞あり  
○ふけ塚は洛東智恩院の近辺にあり後二條院の陵也といふ今ハ福塚といふ  
○富家殿は久世郡宇治の西北にあり知足院の閑白の閑居の地也ハ藤原文の  
別業といふ

ふけふ 夜の闇をいふといふ深をいふといふ物に耽着といふといふと轉意あり  
唇を逆といふ惟耽樂之徒注に過樂謂之耽といふ埃囊抄並異記に負といふ枕を  
紙に身をいふといふといふ○鶯鶉ふといふ轉るといふと耽の義也新撰字鏡に喋  
といふといふ元節度也注に又いふといふといふ又鳩と鳩と鳩と鳩といふ  
○又湛といふといふ耽といふ

△ふご 春とらふ深葩のそとらう関西よめかこ東國よめかひ又びく又ふご又  
米あげぶる其大あるをわくまをこらふ今俗りふごのふらつら○ふご草は  
田作次よく坊ぐる者也○封戸ふむの音也封戸の國伊勢伊賀登河美濃越中  
石見備前周防長門紀伊阿波等封封せと是其國を秘せし故是は禁國大  
と稱せし近江の院宮諸親王の封國頭陞真人の勅文よる也

△ふと 總とふむのり敷散の音之和名欽にも和名布散とる也漢書の注は樂上衆  
飾有流遊羽葆以黃金為文其首敷散若草木之秀華也とる也海録碎事は流  
蘇者乃盤線繡綉之徒五色錯為之同心而下垂者也とる也流遊或は流蘇と作  
る也流遊とる也とる也及ふらふ羽の音も通べり○古語拾遺は麻と  
古語は總とらひしとる也今の上総下総も此音とる也○総國とらひるも  
和名欽よかほふとる也今かぢとる也○房とよ  
むも總の音草木の實とる也和名欽と離れ文選讀ふとる也とる也離々  
結房の意也詩疏は房生ともとる也  
ふとふ 源氏の宮の御ふむのりてとる也

△細流は我身よふさひとる也○万葉集よふさひとる也○はと友一也  
ふさぬる 日本紀に攝とふあり總攝の意とて統字ともとる也  
ふさむす 古事記の秋とる也相應せぬ事よふさむ俗に氣よぬとる也  
源氏よふさひの方とある也氣よぬとる也河海抄に日本紀と引く不祥とる也

△ふり 竹木の節の経より出る詞よ草よ々節とる也又信也とる也○秋  
曲のふりも通つて即節奏也やまふりやふり田樂ふりや大  
双紙よふり○五倍子とる也塩麩子の略とる也○神代紀に柴とる也節の  
糸よや船人のひよりをる也雨氣とふり○みりき葺けふりのる也萬  
葉集よふり玉藻のふりのつとある也扱きとる也わ我終命り

ふり 弘治間録は唐天宝十一載改諸衛士為武士とる也○字は太宗の帝範よ  
君名よ呼也とる也

と云ゆ ○放生氏の説古公田と耕す民汝良家とす是と云りら武士也 ○武  
藝の北史より云 ○附子の近年渡來と

ふり 日本紀に不盡と云え靈異記に富士嶽と云り都氏の富士記に山名富士取郡名  
也と云り万葉集に

天地の分ちし時ゆ神さひて高き貴き駿河ある布士の高嶺

くよあまの世に孝靈天皇の時より涌出と云り信と云るよたしと云り甲州の  
山なりと云り甲州上古田村表に鳥居あり高さ四丈三尺也三國第一山と云り額か  
うきりと云り又駿河大納言卿道法改めせと云り甲州上古田村鳥居  
より山頂まで三百五十七所十七間と云り是は表に云りつふ也宋景濂の  
詩に絶入層雲富士岩蟠根直壓三刈間六月雪花翻素花河原深林放白鷗と云  
えと云り白鷗の此方の鳥あり近來後末と後世の芙蓉等あり詩に作らハ  
葉の蓮花に似と云る也よと倍に絶頂に八葉と云り玉葉集に

目よかひて我日よかろぬ東海や三國をともふ好れと云りやま  
三國の駿河甲斐伊豆也万葉集に

富士の峰よあつたけ雪のみふ月のやうに清く其おろり

物類雪中早苗大友氏源朝臣義鎮

ふり移る田子の浦にれ里人の雪の内よと早苗と云り

○ふりのけうつらと云る事古今集の序に云ゆ續日本紀に富士山下雨灰と云  
え日本後紀に延暦十八年富士山巔自焼と云え其後貞觀六年室永四年は  
と大に焼ぬらと云い記よふ一の山と云る煙と云る世時いと云え  
と云り室永の時よ小山と云る室永山と云り天明一統志に云  
よ西北庚の火列と云る唐より高昌國と云る地なり北國火焰山と云  
山なり古の龜茲國の地なり清異録に為博山香爐峰尖上作一暗窟出煙則聚而  
且直一穗凌空實美觀視親朋儼之呼不二山と云る世に富士香爐也本  
草詠の條に頭上有博山と云る○入穴の東鑑に又ゆ人穴村と云り  
て村祠と云る富士山より三里餘とあり○赤人の詠に万葉集に

田兒の浦也打出而見の真白衣不盡れ高嶺に雪の零り

と云る薩陀山の東にあり不盡れ向ふよ又云り是則田子の浦也と云りて



唐句より〜新古今集より第三句白妙落句以降は〜  
つ〜し〜侍るを〜  
〇白妙のふ〜  
赤人の短  
歌二枚也〇世よひえの山は都のふ〜  
拾遺集

我意の〜  
都のふ〜

此歌より伊勢物語の〜の山はひえの山〜  
量るる詞は〜  
思ふ〜  
ら〜有馬富士の撰津國也鹿活山〜  
奥列岩城山〜  
似〜  
西行法師

ふ〜  
岩城の山の雪の明はの

南都〜  
岩鷲山〜  
富士の三分方〜  
蝦夷の〜  
つ山の東中〜  
高山不二の如〜  
半ひ〜  
讃岐の不二西行の歌〜

讃岐〜  
是を〜  
富士〜  
飯の山朝けの煙〜  
さ〜

薩州〜  
開開のたけ是也

〜  
頼姓郡〜  
はや嶋長や筑紫の富士〜

又筑前志摩郡かやの山又豊府の西〜  
袖布嶽〜  
は〜  
の富士〜  
林せり〇

伊勢朝明郡の布自神社式〜  
少埋繩村あり〇姓は富士名あり富士名義綱ハ  
後醍醐帝の隠岐國より帰らせ〜  
此人實は啓〜  
也〇江戸〜  
未申  
れ風を富士南〜

ふ〜  
万葉集に伏起ゆ〜  
物は〜  
又白仙竟故〜  
上古は足柄清見〜  
〜  
足柄山〜  
富士の〜  
野と通〜  
清見〜  
関〜  
道あり今  
の清見〜  
倅次通〜  
田子の浦を通〜  
中言〜  
此故の海邊の道  
出ま〜  
後彼〜  
この道の〜  
人の讀〜  
也〜

ふ〜  
文德實錄三代實錄の宣命は大神の〜  
賜〜  
節疑の系  
ふ〜  
物事〜  
節〜  
心〜  
ぬ意〜

ふ〜  
萬葉集抄に伏水〜  
流〜  
山城伏見の里も伏  
水の系〜  
古今為家抄に菅原の〜  
大和〜  
吳竹の〜  
山城也〜  
伏見翁者不知何許人〜  
日從坐土末翁取和州平城菅原寺  
側崗名取見崗〜  
伏見院世々親王〜  
准〜  
高親王〜  
始〜  
後土御門院の時也〇伊勢家集後撰集〜  
菅原の〜

ふり

ふりづけ 倭名鈔の森をよめる津又糝ともそえり新撰字鏡はふりづけの本と  
よめる伏見のありりよる柴とほよ入る魚と集るとし柴漬の糸也とらる楊升  
菴集の魚糝とも入少拾遺集よまふりつけの彼のともあり世よふ  
ふりこいふも是也

ふりこころ 古飲よめる顯昭説よふりへぬこころをたぐ也下すの詞よふ  
こころれたるもころとらるはふりこ病ひこころとらる平らふも也  
ふりこころ 奉射的こころ菅三ころ始ころころ信了事神前の射礼と称すとこ  
らる神前のこころ馬よふりて礼式法備る射法射とらる延喜式よも歩  
射騎射とらるべらり又ら始め正月四日ふりや十七日とらる

ふりこころ 蘇子鉄漿<sup>カキ</sup>深の糸四位以上の袍の色也是とつぐと稱とらるは也こ  
ころ○四位以上ふりて此色を用らるる一條院正誓の比よらる  
ふりこころのつぐ 取持月也源氏よ少細流は三月十九日ころり為重卿廿日ころり顯  
の公宴よ

又起取持ころりや六帖  
君をのこめとらる侍の月ふれは八千代もころり有明をき  
ふす 伏取とらる神代紀は俯順俯視<sup>コシテ</sup>おころり俯の音を用おころり万葉  
集よ拜とらる同

ふす 詩經は輝<sup>カキ</sup>はあり新撰字鏡は焔をふりふりこころ俗よ火の聲  
とらるぬとらるふりこころらるふりこころ俗よ火の聲  
○憤を令てとらるぬとらる後撰集よと女とものふりこころ本の書  
内侍のふり侍りころり枕草帝よらるふりこころ大鏡よ村上帝の后  
の才瓜みころり常よふりこころ職人致合よとらる木のふりこ  
らるころり呂氏春秋は痕口薰<sup>スガ</sup>天とらる似

ふりこころ 紀よ衾とらる被衾とらる大被と衾とと取裳乃衾とらる  
取裳は万葉集は敷裳とらるころり西土よ單被綿被とらるころり○武蔵  
國男衾郡よ小被神社あり熱田よ青衾社あり○元旦よ御被と賜ふ日本

紀より見えてなり○万葉集に麻被すといふとぬむいふとぬえいむいふとぬの衣  
あつらふるをいふ○大饗の祿に赤被といふ事雅亮技にええなり○然し  
食新六帖よりいふ褥を籠りのこと○いふがゆも字治拾遺にえい  
紙被く詩集に多く見えたり四六をいふものといふ語あり古のいふとぬ  
民間皆紙ふとまを用ぬり四六の縦横の枚数あり○ふとぬ障子の襖字とあり  
紙被に似たりとの名あり唐詩纂要に紙門とも見えたり○唐詞より  
いふのうらうらと惣いふなり○歎といふなり

ふとぬ  
源氏よりいふ点心のまゝといふ粉熱又粉粥といふ事倭名抄よりいふ又ふとぬ  
くくも見えたり五穀をいふ色よりいふ粉餅といふいふいふいふいふいふいふ  
細い竹の筒といふ其中へ押入ていふいふ置くといふいふいふいふいふいふ  
ふとぬのいふ  
臥猪の床也ふとぬのいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ  
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ  
このまふいふいふ字典に荒獸等也淮南子野荒有荒昔橙櫛窟屋連比以象宮  
室といふいふいふ續草菴集より

△ふせ  
新撰字鏡に蚊といふ格也といふなり○俗に物を量るに幾つふといふに  
伏の義幾握といふに同○古姓に布勢あり布勢の湖に越中國にあり○布施里  
神宮雜事記にえい伊勢國度會郡今久世にあり○布施に布櫛捨施出灌佛の布施  
公卿侍臣長保以前用錢五年改錢用紙世俗淺深秘鈔に裏紙之上書名字女房布施江  
次第に色紙扇等欵仕意也或用銀枝多附五粒松枝明月記に或以糸作花枝附之書録○  
布施氏の東鑑康富記にえいいふ布施藤九郎に陪臣といふなり武名ありて行直ふ  
ふとぬいふ信長召て近臣にせよといふ

ふせや  
万葉集に廬屋といふこと古六帖に東屋のふせや板間のあきぬよりいふあり臥  
屋のふせやといふ賤屋の卑さといふこと○周禮に十里有廬々有飲食三十里有宿々  
有路室といふことと布施屋をいふ廬と訓いふこと又旅人のやどといふこと  
宿といふことありといふ國史義和二年造浮橋令得通行及建布施屋備千橋  
又元慶四年於越後國古志郡渡戸濱建布施壘田四十八町といふこと國語に縣  
無施舎注に施舎者所以施捨實客員仕之處といふ是なり○やの原やふせ

やとよゆるる信濃國伊奈郡へ新古今集よもその承てふまよやうこと又え

うう今同郡三河よ近き所よ伏地と云くふせうらり里にうふせやの遺るるや

ふせご 薰籠とらふふごべかごのや也と云ふせへ夫木集よあやふせごの下に埋火

と又えうう○下季集よふごごあり富士籠とあり○鷹の具よらふ臥籠のや

ふせぐ 防禦とよありふごごの轉るるふごご一神代紀よほせぐとも又えうう又避

又距も訓せり

△ふごぐ 枕草紙よふごぐよくううひるると又えうう風俗のうう人物之拾芥抄

風俗部ありく名目をかき

△ふご 蓋とらふ隔つや成てふかふともよありけぐくと同字也又蓋うふの音蓋と

同戸扇也

△ふご 武塔天神の備後風土記よ又少素盞鳴尊ともる者也一統志よ真武淨樂

國王太子也生而神靈察微知遠長而勇猛云云遠越東海遊覽又遇天神授以宝劍入

武當山脩煉云云武當山一名大和山武當の武塔と類せり神道集よ牛頭天王武

塔神一休也

ふご 二改よありううの轉語也蓋よ意通と底よ對しうふ也○衣の色よ二色

あり

ふご 海人藻芥よ内裏二間所在仁壽殿と又えうう二間の供二間の本尊ありふ

の禁裏の持佛堂也とあり○真俗交談記よ二間御鏡毎月十一日辰一照奉拜之

給嵯峨天皇御記云毎月朔朝御代鏡奉拭之伯督所役也着淨衣用覆面正月朔

無其事除夜勤仕也と又えうう

ふご 雙生とらふ日本紀よ又えうう後よ生るるけりく兄とするるる公羊傳よ又

くくふるる事ふごご産生の序よと云くふごご空同子五雜俎よ論

あり○相似とらふ戦国策よ孿子之相似唯其母知之注よ孿子、双生也と又えうう

ふご 白氏文集よ謬举者坐不當之事と又えうう○舞蹈の系とあり手舞足

踏也公家よの坊をとてふる四度也伊勢よの袖にひいてとる八度也拜舞と

亦同拾芥抄よ舞蹈の再拜置笏立左右在居左右取笏小拜立再拜と又え

ふご 著聞集よありとふごご徒然草よ大雁とらふごごありとらふ御掌

とらふ詩の疏よ趨走促遽之良と又え或の翔をよあり飛良と注せると依るるあり

ふらび 塞をふらび日本紀源氏物語同一ふらびもらぶらびもらぶらび也器物の益よりか  
らる詞のこ

ふらびかき 万葉集よりゆきかき神より西面の義をきき同意なり  
ふらびありつげふかきふらびはらけ人よりあるをふらび今もふらびもてある人か  
らるら

△ふら 潤をらふ倭名抄に潭もら新撰字鏡に澗もらあり深水の義なり  
とら新千載集

ふらにきくふらにきくのすくふらにきくふらにきくふらにきく

人と扶持するより類各纂要に扶持の顧問周濟之也と云ふ  
食をふらにきくといふ○刀のふらに昔の柄口といふトリニ議一統より云ふ

ふら 日本紀に斑をふらにきく今もふらにきくといふ斑馬の駸馬也○鞭を俗にふら  
とらにきく新撰字鏡にふらにきくといふ又鞍とふらにきく馬にむらにきく  
ふらにきく撰集抄に馬にふらにきく源三位頼政の秋に龍巻の藤  
鞭と水にきく枝の潤にきくといふ又巻に古にきくふらにきくといふ古に藤

をりく鞭とせしより語の轉るるもらにきく飾抄に時繪鞭藤巻鞭ふら  
もらにきく又竹根鞭も足利の時より云ふ○紅毛人の鞭は竹根割て皮を  
纏物也

ふらにきく 葛衣也古葛皮といふ布と織る万葉集に山田守翁に藤衣又

須磨の海人の塩やまぬの藤服ふらにきくこれに藤藤りて織ると藤布といふ  
信濃ありといふ○倭名抄に縵衣といふ葛布をりて素服とする故に源氏明星抄  
にもその半に云ふ賤人の服なるをりて云ふといふ実の君も臣も卷に白く麻布の  
半万葉集令義解ふらにきく日本紀に素服とあまのみどしといふ古にきく  
といふ事と云ふらにきく拾遺集に服ぬらにきく

ふらにきく 菘衣といふてすつる涙川といふもまらにきく

ふらにきく 葛袴也その半に古事記に云ふ○蘭袴割せし和名本草に云ふ  
ふらにきく新撰万葉集に藤袴といふ花の色をとて藤と稱し其辨の菘衣ふらに  
きくといふ袴と稱せり蘭草也蘭花といふ○大同の天子菘をふらにきく  
まらにきく日本類聚国史に幸神泉苑琴歌間奏四位以上共挿菊花干時皇

木身頌歌云

みかみのこのまよとつふるは君のおやとのまのまよ

上和之曰まよとつふるは君のおやとのまのまよ 源氏よれし入行ふちにかましつる楽天の詩よ

老菊衰蘭三雨、叢してふるよふれり秋よひのぬくぬくよふるの袴は幅よ奇  
ふらふかは福よめは床よかりけり夏はあつちとひの物よ

○蔓藤袴は林よる葉豌豆のしく花の藤の如し ○貝よふの蛤類はり

れしし ○鷹の野よ入る腫はかくすとらふ

ふぢのくまひに 藤花書の法は後京極棋、政良経より始ふしつる草手歌繪の

類ふる

△ふつ 造化運轉の良しつる夏経津鏡経津主神ふし是ふつとるよき通つ

○物と截断つるよふる日本紀よ師とよふ師靈鏡の徳也字書よ師、断声  
とるよふり刀ふ振声よらぬく一むよとる事よ

ふつよ 日本紀よ都或は盡をよら断然の意絶くしつるよ同し今俗ふつとると

ふつてふつて

ふつま 万葉集よ太馬をよめり是其まことつとつと

ふつな 内裏式よ排書杖西宮記よ奏杖又書杖と見え康富記よ加懸紙如此排丈  
杖者也と見え賭射の題は後京極殿

り我君の御前よつる文のま〜てりつる梓まうふ

○文杖の文とつてむ所を鳥口とつてつる鶴頭より起るよとつて文選注よ  
鶴書、謂鶴頭古者用之以招隠士と見え

ふつり 源氏よえり野穂よ賤しと見えつる太の字をよむつる五津よつる

ふつらふつとの意よ

十二月の佛名佛名經派清凉殿に讀て懺悔す承和五年より始導  
所ハ律師静安と首唱り佛名經ハ十二佛名懺也とらふ

盛衰記よあ〜と見えつてつてかつ〜お〜と見えつてつてとらふ  
とありつてつてとありと見えつてつて不敵の音も又あつてつてと見え

今俗書をよつてつと見えつて其よ大和物語よいふてつとつる湯と捨



くハ宣言ノ万葉集

ふるまひのふとけつとことらひとてあふいのちもまことあふふ

古事記ノ布刀詔戸言しとゆ鎮火祭祝詞も同ノ宣説言のふとて

○大祝詞神社ハ大和添上即チあり古事記より亀甲御占より春日南

室町西角ニ在りし社とふとの明神ト此社ト念ハスル○大和より紀

伊ノ越ふ一徑を太祝詞越とらふ

ふとまぐり 延喜太神宮式ニ著木綿賢木是名太玉串ト云々今ノ神

幸ニ先ニ捧け行神代称ト神代紀磐窟章ノ故事ニ起ルより儀式帳ニ

見エ昔裁物忌父造奉る太玉串徐宜捧て大神宮司ニ給ふ短手一段拍受取

△ふふや 神代紀ニ岐をよあり岐神ト又ゆ莫来戸ト同義あり一袋草紙ニふ

やまゆひの神ノ物トありとあり岐神事神の義ト倭名鈔ニ道祖を云ハカ

○扶桑略記天慶二年九月近日東西兩京大小路衢刻木作神相對安

置凡厥躰髻髻大夫頭上如冠髮辺岳綉以丹塗身成緋彩色或所作女形対大夫而立

之搆几案於其前置杯器於其上兒童雜拜禮殷勤捧幣帛或供香花号改  
神又稱御靈未知何神時人奇之と云々○姓ノ野真戸直あり

ふふや 遣唐使時奉幣祝詞ニ船居ト云々所ノ名ニとも世承あり又

ふふや 船浮居ト云々臨時祭式ニ開遣唐船居祭

住吉社ト又ゆ開船居ト津ノ泊居ト船ト朝ト榜出ト云々万葉集ニ朝開

榜行船ト云々住吉ハ此祝詞より云々播磨國ハ事ト云々式播磨國

賀茂郡住吉神社ト云々續日本紀ニ播磨國ノ某ノ船居ノ地ト奉マシ位

と賜ルト云々○此祝詞船発せん難波ハ湊塞ト云々亦あつて播

磨ノ津ト云々筑々せんとうり給ひすつ此皇神ノ陪もありて忽船津ノ發け時

の事ト云々三代實録ニ遠江國敷智郡濱名ノ湊乃塞ト云々其地ノ角避比古

神ノ開と給ふ故ト神位を授らるト云々亦あり今昔物語ニ行基ノ難波江

行て云々掘て開船ト津を造法を説て人を教化ト云々亦あり

ふふや 樂林ト云々非也和名枚ニ姓訓セリ舟棚の義也万葉集ト云々



新撰字鏡の舩とよめり又柁とよむ童蒙抄のたふさく人のふぶぐ  
 一舟とよ板がらふさく大舩旁枝也とあるはかみり信よらうこの板とよ  
 ふふらり伊勢二所大神宮の御舩代のまの延喜式よるえり水舩酒ふね  
 りかきりて益ある物也太田命傳注の舩代則謂天材木屋舩之靈とらり○  
 正月七月等の廿六夜乃月かんとて動揺とよむの光の舩の如くと俗舩代とらり  
 中よ三身現然とて彩華現つて陳簡齋集の注の所謂嘉州峨眉山の構身  
 光の表ふとらり

ふふらり 舩靈の系續日本紀よるえり住吉神の和魂を祭る延喜式よるえり  
 とく神功紀よ其事えり西土よ天妃以祭る元身教各よ華嚴經の守夜神舩神  
 とく説あり  
 ふふらり 倭名抄よ競渡をよるり荆楚歲時記よえり拾遺集長歌よらり  
 ふふらり 和名抄よ舩をよるり舟装の系也万葉集よとる白新千載集よ  
 古の跡をよるり大井川紅葉の御舟ふふらり

ふふらり 和名抄よ苦舩よめりやとく病也今ら舩よとく注舩とよるり

△ふらり 補任とよ公卿補任の諸司補任の神宮補任のよ本補任とよ  
 公卿補任也

△ふねけ 俗よ人を罵てらるる楚ぬけとらるる成てふぬけとらるる  
 魂也又臍腹らるる

△ふね 舩舩をらるる羽と音を通り續記よ飛舟え文選よも戦舩と三翼とらり  
 ○漕舩刺舩釣舩泊舩繫舩舩渡舩舩蚤舩舩捨舩舩波舩舩芦舩舩分舩舩棚舩舩無舩舩舩  
 とらり渡舩の居家必用よるる蚤家舩の眉公雜字よるる舩の正字通よるる

○顔子家訓よ昔在江南不信有千人糧帳及東河北不信有二萬斛舟とらるる  
 ○万葉集よ舩並てらるる舩浮而もえり○舟よ幾艘とらるる説文よ舩数也と  
 いらり日本紀よかたらと訓せらるる○俗よ棺を舩と称とらるる階書東夷傳よ及

舟置死舩上陸地牽之とらるる如く○君の舟臣の水とらるる諺の荀子の君者舟也  
 張人者水也水則載舟水則覆舟とらるる○すく物と載する器と舟とらるる御舟  
 屋舩覆槽馬槽酒槽餅槽抄紙槽湯槽の類是也字彙等下堂曰舟如今之承盤と

ふんごう

△ふの記 倭名抄に海羅とあり其に似たる海苔とありや致し俗に用布苔と

ふんごう

△ふくや 古事記の故ふくやが下とありふくくと輕き意より柔らふくといふ

△ふびん 文採の昔杖は文と拵む古の風俗也大鏡はふんむくふくといふ○文採

といふ書は信西の作也

△ふびん 覆憫の字也といふ

△ふびん 文部又史部はより神祇令は東西文部を解し詔東漢文直西漢文首と

ふびん

△ふくむ 神代紀に合をよめり万葉集はふくむと云ふは又ふくむといふ

ふくむ

△ふくむ 日本紀に頭髮班雜はみくくふくくといふはもとより本草に今人呼班髮為

蒜髮ていふ如く源順集は

君さうのあけかゝるくく黒髮のふくくあはれ我も若らば

白髪すしうはれ白の体をしう成つて○倭名抄に落はみくといふは今と云ふ  
くくは花と云ふの藝くくは星と花の老く轉達の如くくは名は得くくは  
歎きの一名虎鬚と云ふは是也字彙は路音路音草と云ふなり○津輕の地  
方より蝦夷のあさりより大腕の如く草傘はくく葉はくくといふなり○  
雪はふくくといふは同一雪風又吹雪ふくくは花のふくくといふなり○梁塵  
抄は志のふくくは秋吹風のくけくくといふは野分の類也といふ

△ふへん 武邊ふくくといふは武備者ふくくといふなり

△ふかむ 含むの古語也

△ふまき 帙とよめり書纏のふまき今うづくくもいふなり

△ぬみ 文書をいふ日本紀に經典をもよめり経見のふみきといふは通茂公

うつゝ置きては何うすの鏡手よりてたぬ古めか

説は文の音轉也といふ○枕草紙源氏にふみきといふは詩をうていふ  
めり○河海は文より始て草木の枝よものをつくくは皆其色よつくる事と云ふ  
○書首文是守り王仁の後也姓氏録は是也

ふらぶら 倭名致と校書致と訓せり累代書籍在此致てとゆふと下の下とゆふ  
 七月をいふ穂見月の名なりと小苗月水月穂見月と次第と稲穂の  
 出づる物とふづる物と略語也蔵玉集よふらげ月と名を  
 ○京師の俗今此月と地蔵祭あり西土よも過々家々燈と燃線香  
 地上と指て祭る晦日の事とらう中元祖先と祭るハ明洪武中よ里社と命  
 壇と設け元祀の鬼神と祭らるハ歳と三月清明七月望十月朔と皇明通  
 記よとせり

ふらぶら 和名致と書案と訓せり物よふづくともとせり

ふらぶら 源氏よとゆ花鳥よ御書始よ御註孝經或ハ貞觀政要とよ始  
 らるる事とせり

ふらぶら 日本紀よ文筆をよめり又斐然之藻をふらぶらみやびとよめり  
 ○文を附ふと踏著るよ寄るハ貫之集よとゆ○杜詩よ文章一小技于道末  
 為尊

ふらぶら 日本紀よ躑躅とよめり万葉集よ踏平とちり今も地と平とよめり

ふらぶら 祝詞よ盤根本根履とみととせり万葉集よ石根とみととせり  
 たりくみ反き裂の糸と又浪上とい行さぐみともとゆくと重なる行割と  
 と略ける具と濁ふと音便と

△ふむ 神代紀よ跋又躡又踐又踏とありまみむも乃行とく用けりふ  
 ちよともいふと反ゆまゆ反むと靈異記よ踰もよめり○詩よ韻をふむと  
 らふ押也

ふらぶら 筆とらふ和名致よふらぶととゆ文書の手也とらふてともらつり  
 源氏よつらふらと筆ととゆ○ふらぶら敗筆之○姓氏録よ筆氏あり

燕相國衛滿公之後也善作筆預於十二流因茲賜筆姓とる空海帰朝の  
 時異朝の筆工福氏其従ひ来ると其子孫多くして皆福と称すと弘仁  
 二年空海献握毛筆教坂井名清川造之ともとせり○兎毛筆鹿毛筆朝  
 野群載ると○弘法を五筆和尚とらふ唐帝賜つる四筆を四肢と扱く一  
 柄と口よ含んで一時よ五行の字と各也との事廣傳よとゆ

ふんびと 日本紀の書生又史をよめる文人の義ふびともよめる ○藤原

不比等と日本紀の史とをせり

ふんぶら 日本紀の黄卷とよめる書卷の義の事とらふ説は非也

ふんぶら 日本紀の機をよめる踏放の義をいふをいふ

△ふめく 宇治拾遺の此のふめくといふ事見えずといふはその声ある也

△ふりく 新撰字鏡の麓をよめる林ありく鹿のすむ所之万葉集の踏本と云

△ふりく 万葉集の馬よこをよめる

ふもたし 万葉集の馬よこをよめる

△ふや 文屋の紫氏日記のふやのたゞとらふ大學博士といふ

△ふゆ 冬とらふ冷の轉せる ○殖をらふも貨殖の義の經より轉せる詞ふ

ふゆき

ふゆき 冬木也冬葉の落ふ木といふ万葉集の多くよめる常磐木と對せる

あり ○和名鈔の冬葱をよめるの字は据也今の福とん

ふゆごころり 万葉集の冬隠と云をまきりくれいといふけり子木のむと系

もなき雪霜よりつるるるといふ

△ふえう 不要とせりふととまらふひ加いふ木芙蓉也りと芙蓉

△ふらう 源氏も不用也といふ

ふらう 埃囊抄の童部の萩の枝ふにつく油虫といふ青と虫の長

くもつとつ羽の生るるをかくもつけて頭らよぬるといふ今も雨やん

ても必と出る白粉の如くあけける虫の飛ありくと童の頭よぬるといふ

こがしと呼ぶとこのふるつと蜻蛉と云ふは非也

△ふらい 岳頼也漢の高祖紀よるえといふ

ふらくやまひ 菴珠をいふ楊雄云菴珠微也宋衛之間心病而不甚曰菴珠和劑

局方は傳死骨蒸菴珠と見えり

日本紀續紀等よ曲字とよめる秋よ近江より水蓬ふつふといふ是く俗

は物事よ就て何のふりがあるといふも是也容様といふ辞 ○ふらむ反しよて

みやぶらといふいふふらむをいふいふらむをかみひちとらむを志といふ

いふの致甚多し ○古事記に卷字をよみり三筆又打羽筆ふと是也 ○道行  
がう鳥のうづて坐ぶうふとまふさるをえと頭昭の説也 ○声あまたく紅の  
り出つ時ふらふとまふとひまよんとする詞也 ○万葉集に都のてふ  
まふとらふと熊字の意に似たり俗に大がう小がうとふらふ

ありて 頭昭説よりてし紅のこき色也常より紅がかりして絹は原よりけり  
ありてしらふとれとわらうとまふとまふとらふと出するはれある物ふせ  
あり

ありて うつや物語よまふとらふとあまのてんえ古今集よまふとらふと  
とらふとらふとええとらふとらふとらふと同一 ○万葉集に情あふとらふと  
とらふと

ありてく 雨雪よよめり降頻と降敷の二条ありふとらふとくとも亦同一  
ありてけ 万葉集に振放とちり又振仰ともえとらふとらふと祝詞に振達とよめり  
さうて遠とらふと辞也

ありて 振延てのま古今に袖ありてとらふとらふと土佐日記にとらふとらふとて

どうと白散うけらへてとらふとらふと原氏かくうらとらふとせゆあふととらふと  
の意とある

新古今集巻頭

三吉野の山とわらうと白雲れうらうと里よ春は来よらん

吉野のうらとらふとらふとらふとらふとらふとらふとらふとらふとらふとらふとらふと  
題号は合めりとらふと万葉集よ

昔よとらふと大雪よまふと大原れうらうと里ようらまうとらふと

とらふと新古今の放はら取らふと

ありてけ

万葉集に振ふ髪とちり放垂とらふとらふとらふとらふとらふとらふとらふとらふとらふと  
くまのりやど童女も髪の前よまふとらふとらふとらふとらふとらふとらふとらふとらふとらふと  
とらふとらふと又放髪州とらふとらふとらふとらふとらふとらふとらふとらふとらふとらふと  
とらふとらふとて生とらふとまふとらふとらふとらふとらふとらふとらふとらふとらふとらふと  
と振ふとらふと是也

△あり 経の日より出する詞あり ○振の経より轉せり ○外宮と丹波より伊



して侍るに古郷の人の感ふるあり且故郷をむくして古郷の詞  
試用わするに勿論して砧色は寒さ意也唐詩ふると寒色して万叶日  
記に松風の声れむむとありや古郷といふ天武天皇の御  
よふりまけけるに持統天皇の御代に此離宮にゆきおぼひけ  
るに即ち野の宮をさうして古郷のよめれ山のふちをさむく日  
てにふるゆもいとよめるともさうして○雅經卿父刑部卿頼經朝臣兄宗長卿の  
難波家此郷に飛鳥井家とて共の後世蹴鞠の家祖といふもの也といふ

ふるまひ 遊仙窟に挙止日本紀に進止をよめる振舞の云くして文選に翩翔  
をよみ或は翔字をよめる設字の句書に考得す○俗に饗饗をいふも  
同一馳走といふ如く舞源抄に舞の事と立舞振舞ふといふをいふ口語に  
立ふる舞といふは然草に舞の事をいふと大いなるまじりてさし平治物語  
に大臣の大饗をいふてあいの大臣にてはごぶるまじりてさしあの大  
臣に藤原経宗公をいふ阿波に流されしをいふ也○室町家の時阿波の公  
方あり京の公方と攻よふといふ事あり俗の諺に阿波衆の上まゝなる物といふ

てや庭訓に任國の後上洛の時つらと文書に國土産旅籠振ともありてむ  
いへる事もありふといふ○三代實錄に焼尾荒鎮とて焼尾の鯉魚龍門の  
登りて神人焼尾の故事諸書に又えり今に仲間入の振舞ありて荒鎮の諸書  
に證と見とありてつめしむ和語と名目と呼しよやこれに受領を公解の得  
かありて人の栄と望む事ふしむ其任して上ふ時と饗饗禄ふと責ふ義に  
て庭訓の語擡しとていふや○源氏よふとせまかへけとていふも同語  
よや

ふるまひも 万葉集にすのち山よつてけるも解洗ひてすのちのふりて又折山  
とていふなり友つ  
ふるまひも 題に古久良のよけあり古良の一度達て後障とてありて年とある  
よき久良の一度も達すして年久しくとあるといふ草菴集に久良の題よ  
ふるまひの中にもせめく恨しむや下やの思ひよ年ぬる身も  
ふるまひの古久良の意にそのののひの久良の意也  
ふるまひの 孫姫式に舊枯野とていふそのの上におけるふるまひをいふたため

定家卿の説より野のれし時をいふこと○万葉集よりつて  
やとくをいふ音のまじり

△ふらふみち 古今集よりゆいそのつてけり桓武紀より石上、櫛、

齋宮女御集より鈴鹿山より中道より

△ふま 日本紀より村よりむらと通つて磐余と石村よりあるまふまの略より

今筑前より村里の名より附く呼ぶ郷より庄より

△ふまて 雪のふまてはふま有まを約めしる万葉集より此等のまの

有字を添へり

△ふまて 昔令成りてふまは日本紀及律の古本より短字よりありふれ、互也科と

ふまあせしとよめる俗より觸字より用ひる穩より以拘字をとらふことよめる

漢昏の注より行示也とるえしはいはいはふまていふことよめる

△ふる 風爐とあり茶爐也奈良風爐あり西土より運泥爐よりて土風爐也又

鬼より香の因ふる風皇より来ふるふと色くあり又凡爐あり又別製野風爐  
あり○浴室をふらと称するも風爐より出る語より湯ふる居ふる屋  
ふる等あり○塗師よりふら陰室也○奥の外濱に雁風爐といふまは秋  
尸の来つて時より木成落りてまよるまよるまよる其木成合  
く帰るま残りてまよる木多くなり拾ひ集りてふらに焼て諸人と浴せり  
むらと○角豆のふらあり十八うけり十八の實けり○織物  
の類よりあつ糟の字より用ひる据あるまや

△あわり 介割のま也地域の因より造るよりつて晋昏より分率より

△ふあ 岳為の音也

△ふあひ 武衛とあり兵衛也

△ふあ





とももつらふ言部と部ふと是也○戸をよむも民戸乃一家とよぶとい  
 了詞也○日本紀の貫をよめり戸乃本貫乃類是也○和名抄の線と  
 よめりも經乃糸也今も一といつら新撰字鏡の藤をよぬあといよめり○  
 船とよむい前乃糸船乃前頭也と注せり○神代紀の柑とよめりうぶぐと  
 もよめり邊乃糸成一○寛い火を隔つ乃畧也日本紀のええより重乃糸成  
 一○矢氣をもつて尻乃轉音なる一撒尻ふといつ又ちうへ乃略也梵  
 書の下風とええより和名抄の放尻をいひるといめり○覇とへの假名を用る  
 神代紀のええより佛足石の歌のい多一○最上は口語の結末よといふ○神代  
 紀の棄の此云須多杯とえゆすとい也杯をいよむい呉音也拜といよむ呉  
 音也伊賀の阿拜即とい倭姫世紀の取の作○古各の珮背といの假名とを  
 △一あがふ 歴昇乃糸ふる一徒然神とい也  
 △い 可をいといふ已は日本紀出く古語也物語の多一今といつら關東といは  
 とふれ信濃乃あといつていといもいふなり  
 △いド 瓶子の音也酒をつぐといの也○節會乃夜殿前といつら瓶子といふとい

を置の胡瓶子といふ鳥頸の瓶子也江次第の胡國より來りたる器也といつ  
 へられ 東鑑の平禮といつら折鳥帽子類といつら平侍乃着といふの故とい名く  
 又頭を取平め折るとりて平禮の名を得るとや飾杖の故人着薄塗鳥帽子臨  
 期平禮といふといつら或ハ帶劔といつら時々如木といつらハ帶劔あきる時ハ平禮といふ  
 といつら  
 △いさつむさら 鮮答乃蠻名也といつら雨を祈る事ハ鞍新録にええより武州雨降  
 山雨降明神鮮答あり大と執子れ如一早懸乃時ハ此と山上は持ゆて術法と行  
 一雨ふらざる事ハ一といつら或ハ本名といつらたごさたごさ翻といつら雨金剛  
 雪金剛也といつら雨を祈る時乃唱ふる辭と名とせるなりといつら今ハ山童乃  
 雪やうといつら霞やうといつらもいふ也といつら梵名といつられふといつらあふといつら又金剛  
 石梵諾跋打羅名義集にええより○鮮答の諸歎にあり今ハ世は多きハ馬乃石  
 糞也形色種々いり其大方ハ西爪乃如きと至る牛乃鮮答の甚稀なり色黒く  
 光彩ありて觀つて日本紀のいむいふの腹よりハ玫瑰乃曲玉と出るといふといつら又火  
 と逐く雞卵の如き玉と得又執乃弄てと追落一又死執乃頭中ハ指頭といつら

乃青玉と得るも天文乃比周防の水上山の穿山甲出くある時石玉を吐くも傳つる皆靴答の類也

へいぢう 陪従と云う府生也と云う歌人管絃の人加らふ今頼茂八幡ふの祭と東遊をうたふ者是あり既と源氏よりと云えたり兒屋命太玉命の天孫より陪従と云う言神代紀より云えたり

へう 俗へうのふるといふ電乃音の轉せる也又日本紀の雨氷といふことあり氷の氷乃音を用ゐる也 ○拾遺集物名に豹乃皮と底に鶉乃川波といふあり○門、榜といふ表字也古今注に華表或謂之表木といふ

へう 砲頭釘也といふ音乃轉訛成へい 鉦といふ和乃信字也○可といふもいづる源氏より云えり

へうたん 俗に小瓢乃名と云ふ一瓢飲一簞食と明詠集に瓢簞屢空と云えりより合せくも云ふ也 ○千あり瓢簞ふといひ約腹壺也 ○おとく瓢簞の要舟也 ○八人枕といふ長柄壺也 ○紋形といふたふりといふ鈔袋也といふ ○唐韻に壺以瓢為酒器也といふ本草に瓢樽ともいふ庭訓に

茶、瓢もるも瓢、簞、茶、入あり ○瓢、簞、か、駒乃出るといふ張果の故事也印月江の録にもいふ張果老踏破故壺あり張果紙はとて野馬とせし半太平廣記にあり瓜と合せし描て成へい ○瓢、簞、木、小、赤、實、以、結、ぶ其形似する瓢、簞、石、攝津名塩邑に也

へい と 鯨、字、と、あり、説文に堆射收繫具也といふ増繳也今鷹の具といふ絲麻の糸あり漢語枚に鯨と云はれし訓せり其の倭名枚に鱗とありといふ是也といふ

へいこ 兒戲に睚と云はれし訓せり其の倭名赤子の赤成へい 増鏡といふ書物話に何へいといふいふあり云へいありとあり也

へいこ 姓氏所名に日置をよみ訓の轉せるあり古事記に幣政君あり信濃といふ日置をいふ唱に更級郡といふ天文軍記に日置古城といふ ○伊勢一志郡に日置村ありいふ唱に戸木邑より分ける村あり戸木も本日置の赤也

へぐ 日本紀に折字を訓せり俗に分ち奪ふ事とらふ是也減とへふとらふは通ず

へぐり 大和の平群郡あり○式伊勢負辨郡の平群神社あり志知村に存是は大和國平群郡平群坐紀氏神社に祭る也三代實録に大内記味酒首文雄歎よらふ木免宿禰之後味酒の姓派賜ひ伊勢國に被貫とある者也日本武尊美濃より鈴鹿郡に入たまふ時乃歌よたみどもへぐりの山とよまをたまふま是ふるへ其山の木ふるよまをくまがくまをとくつけたまふ也思國歌也と見えしるより大和の平群とらふあり

へげる ける及び也

へご 秋羅也といつ又鬼へごといふあり薩摩乃西の遠嶋も又夜旬の嶋に産と鳳尾蕉に似く草也薩摩の俗もへごといふも似く大あるといく鬼へごといふといつ或説に飯山横川の谷もありといつ○肥後もくふごといふ長崎もくふごといふ枕もくふごといふ

へごゆ さゆ及す也抑損の意といつへごるるといふへごる及ゆ也

へい 可字とよめり又かきくけこよてもなまけとけとへりへくへりへらへり

へん へんへんへんへんへんを句調のよめり約する辭也容當應宜須合好請ふとも訓せり陟岵の詩に猶來無止註に猶可也と見えり各自よめり詠字とよむの俗語也唐詩に應須二字とよむの料度の辭也といつ又將且ともよむへ徐廣説に昏猶言須也と云

へす 減損といつ○押といふ万葉集よれみかへいと姫押とある是也俗語よもれせへせといつ

へせ

へい 古事記に閉蘇紡麻と見え日本紀に綜麻と見え和名抄に卷子と見え續麻

圓卷名也といつ俗に巻字とよむの卷子の意字書の正義にありと經の麻の糸也といふ續也といふ麻の古訓也○俗に臍とへといつあつたその轉せる也倭名抄にも見えりてへとと臍突といふ

へた 日本紀万葉集に海邊とよみ又邊とへと訓せりとよと通と漢に對しとよ

伊勢河濃の津に部田あり海濱也万葉集に淡海乃海といふ人志るふとる波といふ



緊要者故謂無名指くても

△ぬー 續日本後紀の戸主と又名戸口の對しては戸主の百姓戸口の奴ら如く  
戸口の二項の看へるを

△祓

△の

△へり

△へび

原名苑の蝮一名及鼻くはるを後世蛇よする也和名蝮へびと云ふ  
薩摩女詞よるらむ一とらへびのきぬの蛇也○怪吝の僧毒蛇くはるく錢守  
マ一半靈異記うえゆ近き法と東國の蛇事有る親く関所也○両頭へびは  
此邦よとまありて一種の蛇の吞きく兩頭のこく尾の頭乃出てもありて  
○俗の蛇の足ふく更ふ耳ふくはる蛇無足而行魚無耳而聽蟬無口而鳴と云  
く○著聞集の耳乃生る蛇乃事云々今もたまはる是あり應龍也出羽の  
詭門寺乃鎮守の蛇也とらへ傳了石垣の崩れ時人集りく石を疊りて六七  
寸計の蛇出り投せし者忽ち死ぬ其蛇乃形朋太くて四足あり又享保中伊勢國

一志郡の長一尺計の蛇殺せり其色青く全く画りて蛇のこく四足もあり

く中山傳信録の四脚の小青蛇ありて又常めへみ足ありとありあり

人のく事あるけり安永三年の夏予宅に出入りて三足三所より出りて鱗蛇の

類くや羽州羽黒山とありて山よへて住あり大者二三丈も及び脊三陵を

黒漆乃狗尾の如くは毛生り夜に火をくく山海經の長蛇毛如氈毫也

又伊勢山田にも頭鼠のく蛇出り毛生ぬりて相州江島辨天の宝物

小蛇角二本あり慶長九年八月羽州秋田の僧伊勢茶宮の時内宮の前より蛇の角

と落しとて掲しと納むと添書あり○最上の城主はは安福

氏要宮村の知人ありて至る山の麓に寺の案内あり老僧五尺むりりる皮ふ

く座せりてを聞きぬる蛇也廻り三尺長五丈とあり人子細か尋ん村の米

藏に住りて蛇九尺とありりる法一條とて来て解るる甚馴く辞に隨ふ鼠小鳥は

捕後の兎程を吞ぬ我とて思ひ放去んとすれとゆりて世の交は止る

藝居とて五十年今年九十九歳壯健昔より夜に一度袋を開く明るふ

蛻て山に行必戻り又巳と袋に入或は我が背より洪水流りて又の蛇よま

とありて湖水に浮き納涼する事とありて伊勢松坂と蛇次養て樂む人あり  
禪僧ありて暗夜に香を摸索して誤て蛇の上小手拭つて喰付て痛む  
然地をきくはるる何やと一草次又事あるを蛇に付て蛇の癒く蛇を  
死にせしむる○江州日野に小蛇數十集りて合りて一時とりの内  
は痛み減りて退き或は力弱りて逃去又死に至りて後一足残りて小珠次  
り考へてせし取奪し取る人あり唯圓と石と光彩と似く木鱗子の大き  
なりて是埤雅に蛇珠在口とのなりて尾州東光寺に蛇珠あり大と蛇  
眼肉のてく石に似く石に非すとあり○蛇山の南部にあり蛇多く集る人  
を傷つて○七歩蛇あり毒氣くけりて七歩の間うらむるなり

へびと 日本紀に封をよめり大神宮式に戸人とも又戸口派あり

へびた 日本紀に籍字とよめり戸籍も同郷戸の数を記すの籍也玉篇に凡  
書於簡札皆謂之籍也とある

へび 阿勃參也とありへびともへび又犬がやともへび西國にてやめりとも  
勢州にて油むむやともあり

へやと 津国菟原郡に扁保曾基のり岡本村也或云在原業平之墓

へまに 和名板に版とよめり綜卷のよめり新鷹乃いりて馴ると遠く飛せ  
まよむための具也とよめり手ひらきともへまにとも下考あり

へみ 倭名板に蛇と訓せり反鼻の轉音とも非也○和名板に板とよめり玉篇に木  
腫節中為杖とも本草に靈壽木とも或は今乃山ではりともへみ又數手鞠  
とも丹波の方言にみづとも靈壽杖も此木を用うともあり○へみの御牧ふと歌  
よよむ甲斐國巨麻郡の速見也和名板にえともへみ又速見ともあり速も速もへ  
よむへまの急語也

へん 版位を版とよめりとも和名板に變為二音ともへん宣命版書詞版尋常  
版の名別もあり今義解に版位謂朝賀及祭祀定群臣并百官位之版也ともへん通典に位  
版とも版にやと位牌も座牌もともへん寸法あり長一尺四寸五分厚七分天  
慶四年に定むるに拾芥抄に寸法の異あり時代よもへんともへん○字にへんへん  
らへん扁字をもち柳塘深鎖烟の句に古未對句ふともへん扁に木土水金火の字あ  
る也○御へん餘へん同へんふともへん邊字あり

へんつぎ 源氏よるも采花物語へんとつぎとあり文字乃偏つとて何乃  
字とあると知る事也一説に偏突れ称名院説に文字乃つとて偏と分てつ  
くりと隠して偏と有り何とて文字とありあつる事とあり

へんぐゑ 源氏よるも変化の音也

へんつくり 新撰字鏡に片作と見え晋書に王右軍書多不講偏傍と見え○偏或ハ  
邊に作る拾遺記に縣字或魚邊也と見え楞嚴經に邊見と見えとて偏

傍一は邊旁に作る○この音共俗に二水と三水と對せ也水字在旁之

文といつイハ音赤俗に行人邊とありイハ音疾俗にやまひとありイハ音平俗

に馬だきとありイハ大字也俗にけとの偏とありイハ音剗俗に麻切とありイハ音綿

俗に字むつとありイハ音寛俗に平とありとありイハ音謙俗に吹つとありイハ音殊俗

にふまことありイハ音節ハ邑字也俗にのぼりとありイハ字とすてとあり

へめぐみ 經廻る也或ハ音とてより字ハ遊女記にあり

へも

へや 部屋とありとれく乃部類乃集る處とあり也和語對類に隔室とあり今曲房と

らふ○妾とたやふとありも是なり南史に別房と見え庭訓往來に弓部屋四  
阿屋とあり

へし

へよ

へり 篋とありとありとあり○新撰字鏡倭名抄に鉾とあり和耳也と注せり

今も去らる○近江乃湖とて射れ品とあり子とあり出とあり後乃語也○俗語に

へらを使ふとあり舍糊とあり如

へらす 令減の事也とあり○へらね体へらとあり不減れとあり埃囊

故にへらとありとあり

へらば 日本私記に鳥の腋下毛成らとあり今俗にありとあり訛也とあり

へらり 可也の事とあり人の約め言いとあり古今集に多し万葉集に此詞見え○

俗語のへらへらとあり泥をべらとありの轉語あり延室の比大坂に可坊

とあり異相の男ありとあり

へん 縁といふ延喜式に端とも見え高麗とありのたみ一帖ふとあり○取語



みらふらふ及ひ也

△<sup>みらふらふ</sup> 謙譲とらふ日本紀の儉下とよみ

△<sup>みらふらふ</sup> 経をも減をも謙ともらふ ○みらふらふはみらふらふの延言也

○鄙俗の生産を子法(らふ)減字の意とや

△<sup>れ</sup>

△<sup>ろ</sup> 尾張とらふ泥水(らふ)駿州とらふあひら(らふ) ○蝦夷とらふ魚次(らふ)けとらふ

△<sup>ろ</sup> ○万葉集とらふこやま(らふ)とらふ横山(らふ)助字也 ○伊豫の鄙俗(らふ)とらふ東國と同

△<sup>ま</sup>

△<sup>か</sup>

△<sup>名</sup>

△<sup>た</sup>

倭訓栞前編二十七終



